

学齡超過で行き場を失った ある南米ルーツの若者の歩み

—複線径路等至性モデリング (TEM) による分析から—

山森理恵 (明治大学)
yamamori_m@meiji.ac.jp

【要約】

本研究は南米ルーツの若者1名が歩んだ過程を聞き取り、TEMにより分析を行うものである。研究協力者が学齡を超過して行き場を失いながらも自分らしい生き方に至る過程を幼少期からたどり、明らかにする。その結果、この若者は地域の支援教室から適切な支援を受けて高校進学し、必要な進路指導や進学情報を得て、特性の生かせる入試方法で大学に進学し、模索しながら歩いていったことがわかった。本稿では特に、学齡超過の状態での高校進学を目指す若者にとって、日本語の土台を築き、高校受験に向けた適切な指導が受けられる場の必要性を指摘する。

1. 研究背景

日本における在留外国人数は、2025年6月末の時点で約397万人となっている(出入国在留管理庁2025)。グローバル化が進む中、人口減少と労働力不足が加速する日本において、在留外国人の数は今後ますます増加していくことが予想される。外国籍の子どもの数も、小学校相当・中学校相当の合計が2019年は約12万人であったのが2023年には約16万人となり、今後一層の増加が見込まれる(文部科学省2025)。その一方で、外国ルーツの子どもの教育機会や進路保障は十分とは言えない現状がある。

2023年度の、全中学生等と日本語指導が必要な中学生等の卒業後の、高等学校や専修学校などの教育機関等への進学率を比較すると、全中学生等は99.0%であるのに対し、日本語指導が必要な中学生等は90.3%と隔たりがある(文部科学省2024)。進学も就職もしていない者の割合は、全中学生等は0.8%にとどまるのに対し、日本語指導が必要な中学生等は5.0%に上っており(同上)、外国ルーツの生徒の中学卒業後の進路選択の難しさがうかがわれる。

高校卒業後の進路状況も、全高校生等と日本語指導が必要な高校生等の大学や専修学校などの教育機関等(短期大学、専門学校、各種学校を含む)への進学率を比較すると、全高校生は2023年度、75.0%であるのに対し、日本語指導が必要な高校生等は46.6%と大きな開きがある(文部科学省2024)。

また、樋口・稲葉(2018)によると、2010年の国勢調査における19~21歳の国籍別進学状況は、大学に在学する割合が、日本国籍45.2%、韓国・朝鮮47%、中国44.5%、ベトナム30.0%となっているのに対し、フィリピン9.7%、ペルー11.3%、ブラジル11.8%と、フィリピン、ブラジル、ペルー国籍の若者の割合の低さが際立つ(樋口・稲葉2018:572)。大川(2022)は、「エスニック・グループにおける低い大学進学率は、そのエスニック・グループが日本社会において格差に直面していることを示

しており、改善されない進学率は世代間の不安定雇用の再生産を引き起こしている」と指摘する。日本学術会議は「より多くの大学における、外国人生徒対象の推薦入試、特別枠の実施」を提言しており（日本学術会議 2020）、大学の中には、外国ルーツの生徒の進学率の低さを憂慮し、特別枠を設置する取り組みが一部に見られるという指摘もある（山森・田口 2024）が、留学生入試やその支援体制が非常に充実しているのとは対照的に、全国の大学の外国ルーツの生徒の存在に対する認知、制度や体制は十分とは言えない（同上）。「ルーツの多様性を高等教育の場でも保障する制度設計をすることが求められる（樋口・稲葉 2018：579）」と指摘されている通り、外国ルーツの若者が進学を希望した場合に、ルーツに関わりなく進路が保障される体制や環境を整えていくことが急務であると言える。

2. 本研究の目的

本研究は、ルーツに関わりなく、若者の進路が保障される体制や環境の整備を目指し、外国ルーツの若者がどのように高校・大学の進学を経て就職に至っているか、事例を集め、影響を及ぼす要因を探り、これから進路を考える外国ルーツの子どもたちと学校教員・地域支援者などに示すことを目的とする研究の一環である。本研究では、南米ルーツの若者 B、1 名の事例を報告し、分析する。田口・山森（2025）において、ほかの研究協力者のデータとともに B のインタビューの一部（大学進学以降についての語り）をデータとして分析を行っているが、本研究では、学齢を超過して行き場を失った B が幼少期から自分らしい生き方に至る歩みを丁寧にたどり、ロールモデルの一つとして事例を蓄積するとともに、学齢超過の状態から高校・大学進学、就職を果たした若者に影響を及ぼした要因を示し、特に学齢超過の状態に陥った若者にどのようなことが必要であるか指摘することを目的とする。

3. 研究方法

3.1 研究対象

本研究の対象は、日系ブラジル人の B、1 名である。B のお母さんはペルーの方であるが、B は出身国の記入の際「ブラジル」と記入し、出身国はブラジルと認識している。関東地方の地方都市で生まれ、日本の幼稚園から日本にあるブラジル人学校¹に入学している。小学校 3 年生で、家族でブラジルに帰国したが、5 年生で再び来日し、日本のブラジル人学校で中学校まで勉強した。経済的理由から中学卒業を区切りにブラジル人学校をやめ、近くの教会の教室と大学の支援教室に通って中学校卒業程度認定試験に合格し、公立の定時制高校に進学している。その後、公立大学に進学し、地元の商社に就職したものの、退職し、再就職する。そこで通関士の資格を取得した後、再び退職し、現在は貿易事務の仕事に従事している。この B に対し、2024 年 11 月から 2025 年 5 月にかけて計 4 回、半構造化インタビューを実施した。さらに 4 回目のインタビュー後、追加の質問をメールで送り、回答頂いた。調査にあたっては、明治大学の「人を対象とした研究等に関する研究倫理委員会」の承認を得て実施した（申請番号 2409）。

3.2 分析方法

B に対し行ったインタビューは、録音して文字化し、それをもとに複線径路等至性モデリング

¹ 本稿における「ブラジル人学校」「小学校」「中学校」などの表現は原則として、B がインタビュー時に用いた表現に従っている。

(Trajectory Equifinality Model、以下 TEM) の図を作成して分析を行った。TEM とは、「人間の経験を扱い、人間の時間経過とともにある文化化の過程、人生経路のモデルを描いていく手法 (サトウ・安田 (監) 2023 : 7)」である。個人に経験された時間を重視する手法であることから、過程を明らかにするために適していると考え、この方法を採用した。

TEM では、等至点 (Equifinality Point: EFP) を設定する。等至点は、「研究者が関心をもった現象」 (安田・サトウ 2017: 5) であり、本研究では、調査対象者が「自分らしい生き方を確立する」こととする。「自分らしい生き方を確立する」こととは、「こうやって生きていく」とゆるぎない決意を固める、あるいは「こうやって生きていける」という自信を得るなど、今後の人生を切り拓いていける状態に至ることとする。

TEM を描く際は、両極化した等至点 (P-EFP)、分岐点 (BFP)、必須通過点 (OPP) セカンド等至点 (2nd EFP)、両極化したセカンド等至点 (P-2nd EFP) などの設定を行った。本研究におけるこれら諸概念の設定は表 1 の通りである。

表 1 TEM の諸概念と本研究の事例における諸概念の設定

TEM の諸概念	本研究の事例における諸概念の設定
等至点 (EFP)	自分らしい生き方を確立する
両極化した等至点 (P-EFP)	自分らしい生き方を確立できない
分岐点 (BFP)	① 5 年生のときに日本に行くことなる、日本の小学校とブラジル人学校のどちらがいいか聞かれる ② 先生に「日本語、知っているのにもったいない」と言われる ③ お母さんが教室の情報を聞いてくる ④ 貿易事務という仕事の存在を知る ⑤ 通関士の資格に関心を持つ
必須通過点 (OPP)	① ブラジル人学校の小学校に入学 ② ブラジル人学校の小学校を卒業、ブラジル人学校の中学校に入学 ③ 公立高校入学 (昼間の定時制) ④ 公立大学に入学 ⑤ 大学を卒業し、P 社 (工作機械を扱う商社) に就職
セカンド等至点 (2nd EFP)	世界レベルの大手物流会社で航空貨物を担当して、通関士としてさまざまな商品を扱う
両極化したセカンド等至点 (P-2nd EFP)	S 社で貿易事務を続ける

4. 結果と考察

4.1 結果

B の語りをもとに、B が「自分らしい生き方を確立する」過程を TEM 図にした (資料 1)。その際、4 回目のインタビューの後にメールで行った追加質問に対する回答もデータとして参照した。過程の詳細を時期区分ごとに以下に記す。「」は B の語りの引用 (原文ママ)、[] は筆者による補足である。

4.1.1 第 1 期：親について移動

B は日本で生まれている。日本の幼稚園に通ったため、会話の日本語は「大きくなっても残ってはいた」ということである。小学校は日本のブラジル人学校の小学校に入学する。「スペイン語しか話さなかったもので、最初はきつくて」とポルトガル語で苦労したと語っている。その後、3 年生のときに家族

でブラジルに帰国し、ブラジルの地方都市の公立学校に学年を1つ下げ、編入している。そこではポルトガル語を覚え、順調に過ごしていた。しかし、5年生の夏に再び来日することになる。このとき両親からブラジル人学校と日本の学校のどちらがいいかと聞かれる。Bはこの頃はもうポルトガル語に慣れ、日本語は「ぼやぼや」になっていて、ポルトガル語が話せて居心地がよさそうだとブラジル人学校を選択している。両親はBの選択を尊重し、そのため、一家は静岡県で暮らすことになる。静岡県のブラジル人学校では週1、2回日本語授業を受けながら中学を卒業するまで学んでいる。成績はいい方であった。しかし、リーマンショックで母親が仕事を失い、ブラジル人学校の学費の支払いが困難になり、中学校卒業を機に学校をやめることになってしまう。それまで親についていくことしか考えていなかったが、学校をやめる前に日本語の先生から「日本語、知ってるのにもったいない」、「もっと日本でチャレンジしてみる気ない？」みたいな、そういったこと言われて、日本に居続けることを意識しはじめ、「日本の学校に行かないといけない」と思い始める。

4.1.2 第2期：日本のルールに乗ることを目指す

以前から親から、日本に残るかブラジルに帰るか考えてみるように言われていたが、先述の先生のことばをきっかけに、日本にいることを決意する。ブラジルは自分には合わない、将来像が見えないということも理由であったようである。日本にいるためには日本の学校に行かないといけない、日本のルールに乗らないといけないと考え、ブラジル人学校をやめた際、日本の中学校への編入を試みる。しかし、中学校に相談に行ったときに「職員はできないと一点張りの回答で対応してもらえなかった」そうである。そのときの気持ちについて、Bは追加質問のメールで以下のように述べている。

[周りの友だちが中学校に編入できたのに、自分だけが満15歳を理由に認められなかったことは]正直、ずるいと思いました。歳が1つだけ離れていることだけで、なんで編入できないんだろ？と思っていました。周りは前に進んでいる印象があり、自分だけが取り残された気持ちになりました。[中略]編入の制度が整っていないだけで回り道(中卒程度認定試験)を受けないといけないし、今結果的によかったです、当時は人一倍努力しないといけないことに対してため息が出ていたのを覚えています。笑[Bのメールより引用]

編入が認められず、「取り残された気持ち」になったと述べている。

学校をやめた後、2、3ヵ月家にいたが、Bの母親がカトリック教会の教室と大学の学習支援の情報を入手してくる。人づてでそれらの教室とつながることができたのは「すごい運がいいなと思って」と語っている。教室では「いろんな道を開いて提案とかも受けた」ということである。そして、両方に通い、教会の教室で日本語能力試験の勉強と国語を含む教科の勉強やポルトガル語の勉強、大学の支援教室では中学校卒業程度認定試験の勉強をする。上座下座といった日本の常識についても学ぶ機会があったそうである。その結果、日本語能力試験1級に合格し、中学校卒業程度認定試験にも合格する。日本史はゼロから勉強したため、認定試験の受験に不安が大きかったそうだが、「本当に運良くて、受かって」いる。合格後はすぐに、教室で高校受験の準備を促され、高校の情報や過去問も提供を受けて勉強を続けた。そして、教室で紹介された学校のうちの一つに合格を果たす。ブラジル学校をやめてから1年と少しのことであった。Bは、教室から願書の入手、印紙購入など手続きの支援も受けたこと、「[教室で]言われたから、そっか、あるんだみたいな。で、勉強しなきゃみたいな」と思ったと語っている。高校進学に際して教室が果たした役割の大きさがわかる。

合格して進学した学校は昼間の定時制であった。外国ルーツの生徒のための支援はあったかもしれないが、Bは日本語がわかったので必要なかったそうである。そこでは進学する生徒は一部で、大半が卒業後就職する学校であったが、1年生のときには既に「とりあえず[日本の]ルールに乗って大学まで行かなきゃっていう意識」があったそうである。テレビを見てもアニメを見ても「みんな大学受験するし」、「将来、何になりたいっていうのはあんまり意識はしてなかった」ものの、「工場とかに勤めるイメージはなかった」ということであった。親からも工場は勧めないと言われ、自身でも工場はきれいではないイメージがあり、働くなら事務所で働きたい、そのためにはルールに乗って大学に行かなければと考えたということである。鄭(2023)は南米ルーツの若者に対する調査から、親世代の工場勤めを「底辺」であると認識し、大学進学が「底辺」から抜け出す可能性の一つと捉える「底辺意識」の存在を指摘しているが、Bもそういった意識があったと見られる。数学の授業の中で、高卒と大卒の年収の差が取り上げられたことも、大学への意識を高めたようである。

しかし、2年生になり、大学受験を意識して焦り始める。そのようなとき、高校の先生がいい意味で厳しく接し、志望校の絞り込みのために問いかけ、突き詰め、Bが得意とする英語で推薦試験が受けられる進学先を探してくれたそうである。センター試験は難し過ぎて無理だと思っていたときに、得意の英語が生かして国際関係が勉強できると紹介され、志望を近くにある公立大学に絞った。英語の小論文の添削をしてもらい、英語の面接と小論文による英語推薦で受験し、志望校に合格する。Bは、「英語だけは得意」で、英語の面接と小論文だけだったから合格できたと語っている。

4.1.3 第3期：国際的な仕事がしたい

大学入学後、1年生のときはチューターの先生がついたが、特に外国ルーツの学生のための支援などはなかった。留学生向けの支援は、相談すれば受けることができたかもしれないが、Bは特に必要としなかった。大学の授業では日本語で難しさを感じるようなことは特になかったそうである。

大学に入学してから、国際的な仕事がしたいという意識が芽生えてきたということであったが、就職活動では苦勞する。東京への憧れを抱き、東京での就職を夢見るが、学習指導要領に沿った勉強をしていないという学力への自信のなさから、基礎学力の測定を含むSPI²に難しさを感じる。東京での就職活動も試みたが断念し、地元で就職活動を行う。物流にも少し興味があったが、営業職でばりばり海外出張に行くことに憧れ、海外と取引を行い、工作機械を扱う商社(P社)に就職し、工作機械を扱うようになる。しかし、インドやメキシコに出張したりしたが、専門知識を必要とする工作機械を扱うことが合わず、人と話す営業職も合わないようになる。

4.1.4 第4期：貿易事務の仕事がしたい

仕事が合わないと感じて居づらくなり、P社を1年半で辞めてしまう。海外を旅行したい、周りの友だちがたくさん辞めて再就職している、まだ20代前半で何とかなるだろうと考えたことも理由であった。

BにとってP社は「ミスマッチ」であったが、しかし、P社で貿易事務という仕事を知り、具体的にどういう仕事かを理解し、「これだ」と感じる。隣の席に貿易事務の仕事をする方がいたためである。P社が、貿易事務を目指すきっかけを与えてくれたのである。

² SPIとは、企業が採用活動時に行う総合適性検査で、基礎学力や性格特性を測定するものである。

退職後は海外旅行をして、ホテルでアルバイトをして10か月ほどを過ごす。そして貿易事務を希望して就職活動を行い、練習台としてQ社を受け、営業職として内定をもらうが断る。しかし、P社の貿易事務のポストに空きが出て貿易事務の担当として入社することになる。ところが、貿易事務の仕事に就いたものの、コロナ禍の影響でBが担当する仕事がなくなってしまい、総務に異動になってしまう。

4.1.5 第5期：通関士として仕事がしたい

総務に異動になってしまい、貿易関連の仕事に戻りたいと考え、国家資格である通関士の資格取得を目指すことにする。取得できたら転職をしようと計画し、年1回の試験の合格を目指して勉強した。もう20代も残り少ないという危機感から1回での合格を目指し、週末も丸1日勉強し、体調に異常が出るほど勉強したそうである。法律用語も含まれたが日本語に関する困難さはなかった。「多分、人生で一番、勉強したとき」だったと語っている。その結果、「何とか報われて」難関の試験に1回で合格することができた。通関士の資格を取得できたことは大きな自信になったそうである。自分らしい生き方を確立した、やっていけるという自信が持てたのは、通関士の資格を取得したときであるとBは語っている。そして、Q社をやめ、化学薬品を扱うR社に入社し、通関士として働き始める。しかし、R社に入社後は同じ仕事の繰り返しで成長が見えないと感じるようになる。

4.1.6 第6期：仕事の幅を広げたい

R社で通関士として働いていたが、成長が見えなくなって、仕事の幅を広げたいと考えるようになる。給与が低く、親への送金も難しいとも感じて、2年半余りで転職を決意する。退職を引き留めるプレッシャーも大きかったが、R社をやめて、アパレル関係のS社に転職する。転職はちょうど1回目のインタビュー実施の直後であった。S社に入ってから、通関士の経験やこれまでの経験を生かしながら貿易事務を担当している。

インタビューの際、Bは、貿易事務や通関士として自分で荷物を動かし、輸出入をして人に荷物を届けること、そのための書類を速やかにさばくことの面白さを生き生きと語っていた。それらの仕事に大きなやりがいを感じているようであった。今後については、幅広い仕事を経験し、世界レベルの大手物流会社で航空貨物を担当し、通関士としてさまざまな商品を扱いたい、自分で荷物を動かして手続きをして届け、社会を動かしていきたいと語っていた。そのためにも、今はS社でアパレル商品の知識を増やす努力をしている。

4.2 考察

Bの、幼少期から自分らしい生き方を確立する過程を詳細に見てきた。Bが自分らしい生き方の確立に至ったのは、さまざまな要因が重なった結果であると言えるが、ここでは、学齢超過で行き場を失ってしまったこと、行き場を失ったものの高校に進学し、大学進学を実現したこと、模索しながら進んでいったことで自分らしい生き方の確立に至っていることについて注目する。

4.2.1 学齢超過で行き場を失う

Bは、小学校時代、ブラジルに帰国した際、学年を1つ下げて編入しており、中学校卒業を機にブラジル人学校をやめた際は、満15歳を過ぎていた。そのため、周りの友だちは中学3年への編入が認め

られたが、Bは編入を拒まれ、進学への道が見出せずにいた。しかし、「運よく」2つの支援教室につながることができ、Bに適した支援を受けることができた。日本語や国語などの教科、日本の常識などを学び、中学校卒業程度認定試験の受験を勧められ、合格後はすぐに高校受験の準備を勧められている。制度のはざままで、2つの支援教室からBが必要とする日本語や教科の勉強、中学卒業程度認定試験や高校受験の指導など適切な支援を受けることができたことが、高校進学、その後の大学進学、現在につながったと言える。田中（2016）は、学齢を超えた若者が日本で高校進学を希望する場合、そのニーズに合った教育を受けるべきであると指摘しているが、Bに対しては2つの支援教室がその役割を果たしたと言える。

また、Bはインタビューの中で、日本の社会では「やっぱり日本語がすごい鍵だ」と語っている。「試験を受けたりとか、自分で勉強したりとか、その方法は映画だったり、例えば教科書であったり、実際に話したりっていう方法で日本語能力を上げて、知識も上げて」そこを土台としないと日本社会では難しい、「やっぱり日本語できたほうがいろんな選択肢が増える」と語っている。Bにとって、支援教室に通う間は、そのような土台を作る時間となったのではないだろうか。

Bの場合、たまたま2つの教室が補完し合う形で、いろいろな勉強をし、日本語の土台を築き、高校受験までの支援を受けることができた。このことからわかることは、学齢を超え高校進学を希望する若者がそれぞれのニーズに適した教育を受けられる場の整備の必要性である。小島（2021）は学齢を超えた外国につながる青少年が高校進学するための方法を示し、地域のボランティア団体にはサポートする方法が蓄積されていると述べている。非常に望ましいことと言えるが、「運よく」つながるのではなく、適切な内容の支援を、地域を問わず誰もが常に受けられるような体制を整えることが必要である。夜間中学を学齢超過の場合の受け皿とする動きが進んでいるが、Bにとって夜間中学進学は年数がかかり、適した選択肢とは言えなかったと考えられる。高校進学を希望する場合、日本語の土台を築き、高校受験のための適切な指導を受けることができる場を、地域の偏りなく整備することが必要である。

4.2.2 大学進学の実現

Bの進学した定時制高校（昼間）では、大学進学する生徒は一部であったが、Bは適切な進路指導と進学に関する情報の提供を受ける。教師による進路指導から、Bが得意とする英語の生かせる地元の公立大学を志望し、英語推薦で受験し合格している。ここからわかることは、適切な進路指導と進学情報の重要性である。単に情報提供をするだけでなく、個々の生徒の特性に合った指導や情報提供がなされたことがBの大学進学を実現し、後に自分らしい生き方を確立することにつながっている。周囲の教員、支援教室の支援者は、生徒一人ひとりの特性を見て進路指導をすることが求められる。

また、Bの場合、志望した公立大学が英語推薦を実施していたことが鍵となったと言える。Bの持つ強みを生かして受験することができた。外国ルーツの若者は、それまでに受けた教育が異なることで一般的な入試制度が不利に働く可能性がある。多様な文化的背景や日本語学習に取り組む努力を重ねてきた経験といった外国ルーツの若者の特性も考慮しながら、一人ひとりの強みを評価できるような多様な評価方法で選抜を行うことが求められると言える。

4.2.3 模索しながら進んでいく

田口・山森（2025）でも指摘する通り、やりたいことというのは、はじめから見えているとは限らな

い。Bは、高校時代はぼんやりと国際関係を志望し、国際的な仕事ができる会社に就職しても、最初は「ミスマッチ」であった。しかし、模索し、前に進み続けたことで貿易事務という仕事と出会い、通関士について知り、資格を取得して自分らしい生き方の確立に至っている。Bの事例は、やりたいことが見えずとも模索しながら前に進んでいくことの大切さを示していると言えよう。

5. まとめと今後の課題

ブラジルルーツの若者1名が自分らしい生き方を確立する過程を、インタビューによって幼少期から辿り、明らかにした。今井(2008)は、「自分なりの人生を切り開こうとする生徒にとって、道標や導き手となる人の存在は重要(今井2008:195)」であると指摘しており、大川(2022)は「ロールモデルにも多様性が求められる(大川2022:72)」と述べている。1つの事例ではあるが、学齢を超過してから日本の高校への進学を果たし、希望の大学に進学し、自分らしい生き方の確立に至った本事例は、これから成長していく外国ルーツの若者にとって1つのロールモデルとなり、希望を与えるものであると考えられる。また、リーマンショックによって行き場を失ったブラジル学校の中等部修了生の存在を伊東(2021)は指摘しているが、そういった若者がその後どのような過程を辿ったかの事例としても注目に値する。さらに、Bの場合、地域の支援教室が大きな役割を果たしていたが、本事例は、学齢を超過して進学を目指す若者が日本語の土台を築き、高校受験のための適切な指導が受けられる場を整備することの必要性を示している。また、教師による個々に適した進路指導・進学情報の提供や、外国ルーツの若者一人ひとりの能力を適切に評価し、進学を保障する多様な大学入試制度の重要性、模索し前に進むことの大切さも示していると言える。

これから成長していく外国ルーツの若者が十分な機会を得ることができ、Bのように「取り残された気持ち」になることなく、将来の選択肢が増えるよう、具体的な策を講じていくことが急務であると言える。筆者自身も大学教育に関わる者として、大学を含めた教育の機会の保障を進めることを自らの責務と考え、取り組んでいきたいと考える。

付記

本研究は、JSPS 科研費 24K05774 の助成を受けたものである。

参考文献

- 伊東浄江(2021)「第6節 ブラジル学校から公立高校進学」『Q&Aでわかる外国につながる子どもの就学支援』明石書店, 191-196.
- 大川ヘナン(2022)「在日ブラジル人二世の教育達成を阻むものは何か」『多文化関係学』19, 61-80.
- 小島祥美(2021)「Q16 学齢を超えた外国につながる青少年がいます。出身国でも日本でも義務教育を終えていませんが、日本で高校進学できますか?」『Q&Aでわかる外国につながる子どもの就学支援』明石書店, 129-133.
- サトウタツヤ・安田裕子(監)(2023)『カタログTEA(複線径路等至性アプローチ)一 図で響きあう』新曜社
- 出入国在留管理庁(2025)「令和7年6月末現在における在留外国人数について【令和7年6月末】公表資料」<<https://www.moj.go.jp/isa/content/001447921.pdf>>(2026年1月31日)

- 田口香奈恵・山森理恵（2025）「大学進学を経た南米諸国ルーツの若者が自分らしい生き方を確立していく過程—大学進学以降に注目して—」『異文化間教育学会第46回大会 プログラム』
- 田中宝紀（2016）「中学卒業後に日本へ—外国にルーツを持つ「既卒」の若者支援」READY FOR「日本語がしゃべれず、ひとりぼっちの子どもにオンライン授業を！」
- <https://readyfor.jp/projects/kodomo_nihongo/announcements/40515>（2026年1月31日）
- 鄭安君（2023）「南米ルーツ大学進学者のキャリア形成とダイバーシティ—13人の「深層的なダイバーシティ」に着目した—考察—」『異文化経営研究』19, 103-118.
- 日本学術会議（2020）「提言 外国人の子どもの教育を受ける権利と修学の保障——公立高校の「入口」から「出口」まで 令和2年（2020年）8月11日」日本学術会議地域研究委員会
- <<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t289-4.pdf>>（2026年1月10日）
- 樋口直人・稲葉奈々子（2018）「間隙を縫う—ニューカマー二世世代の大学進学—」『社会学評論』64(4), 567-583.
- 文部科学省（2024）「令和5年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」
- <https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_kyokoku-000037366_4.pdf>（2026年1月10日）
- 文部科学省（2025）「令和6年度外国人の子供の就学状況等調査結果」
- <https://www.mext.go.jp/content/20251002-mxt_kyokoku-000045092_2.pdf>（2026年1月10日）
- 安田裕子・サトウタツヤ（編）（2017）『TEMでひろがる社会実装—ライフの充実を支援する—』誠信書房
- 山森理恵（2025）「ある外国ルーツの若者が大学進学・卒業・就職に至った過程—複線径路等至性モデリング（TEM）による分析から—」『日本語教育連絡会議論文集』37, 200-212.
- 山森理恵・田口香奈恵（2024）「外国ルーツの生徒を対象とした大学入試制度と受け入れの実態」『明治大学教養論集』578, 185-209.

資料1 BさんのTEM図



